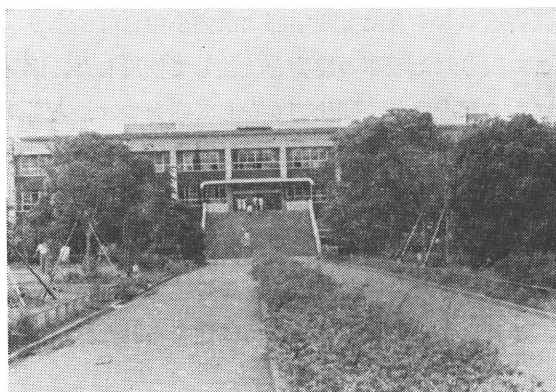


## 第14章

### 附属図書館

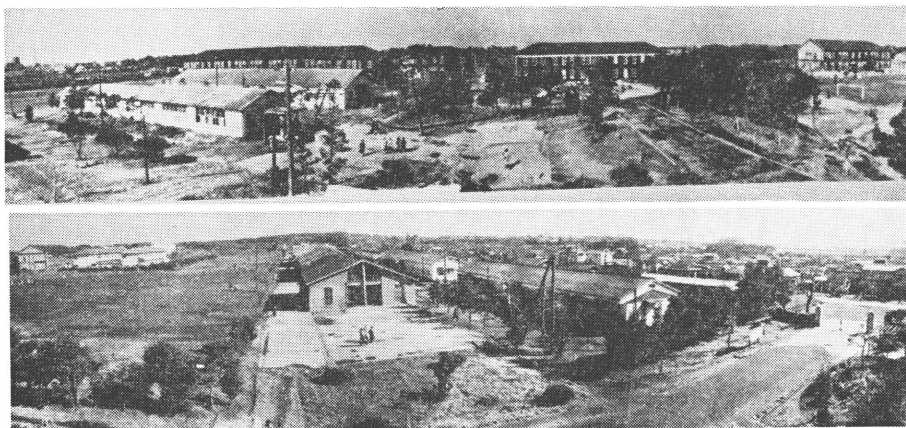


#### 第1節 発 足

##### 1. 附属図書館の設置

附属図書館本館は昭和24年5月、千葉大学の創立とともに設けられた。当初は、館もなければ館長もいない、その上図書も持たないという、無形の観念にすぎない図書館であったが、それから数か月おくれた昭和24年9月、初代館長として大岡保三教授が発令された。

昭和25年4月、文理学部が設置され、東京医科歯科大学の子科を包括し、この子科の図書を基礎にして、同構内に図書館本館が開設された。



文理学部構内

上の写真：文理学部管理棟及び学生部(中央建物)、附属図書館(左手前)

下の写真：文理学部化学教室

## 第1節 発 足

図書館がおかれた文理学部は市内小中台町にあり、もとは陸軍防空学校の敷地で、そこに残された陸軍の建物を改装して使用した。図書館は高射砲を運ぶ自動車の旧車庫に木の床をはり、間仕切りをして窓をつけ、ともかく人間のための家屋らしく改装したものにすぎなかった。書庫は図書館から20メートル以上も離れたところにあり、3階建ぐらいの高さの、この地区で唯一の高層不燃建築物であった。書庫の中はガラスで、窓はほとんどなく、2階半ぐらいのところに、狭い廻廊のついた、不思議な建物であった。伝え聞くに、この建物は、防空学校で模型飛行機を吊るして走らせ、これをねらい打ちするために建てられた試射場であったらしい。

## 2. 分館の設置

### (1) 医学部分館

医学部分館は、大正15年に千葉医科大学附属図書館として、既に、官制上設けられていたものであり、千葉大学の設置とともに、医学部分館として発足した。

### (2) 教育学部分館

教育学部分館は、前身の千葉師範学校男子部の図書を基にして、市内市場町に開設された。教育学部には、別に、教育学部分校図書室が置かれた。これは、前身の千葉師範学校女子部および千葉青年師範学校の図書を基にして、印旛郡四街道町に開設された。この分校の敷地は、陸軍野戦砲兵学校の跡地で、図書室は、将校集会所があてられた。

### (3) 薬学部分館

薬学部の前身は、千葉医科大学附属薬学専門部であり、大学設立に際して、千葉医科大学附属図書館より、図書の保管転換をうけ、その図書を基に、薬学部分館として開設された。

### (4) 工学部分館

最初は、工芸学部分館として発足したが、1年後に工学部と改称されたのに伴い、工学部分館となった。前身の東京工業専門学校の図書を基にして、松戸市岩瀬に開設された。

この工学部の敷地は、陸軍工兵学校の跡地で、分館の建物は将校集会所があてられ、そこからの眺望はなかなか素晴らしいものであった。

### (5) 園芸学部分館

園芸学部分館は、前身の千葉農業専門学校の図書を基にして、松戸市戸定に開設された。

(6) 腐敗研究所図書室

腐敗研究所図書室は、昭和21年9月、千葉医科大学附置腐敗研究所が開設されると同時におかれたが、千葉大学の設置により、そのまま腐敗研究所図書室として発足した。

(7) 文理学部図書室

文理学部図書室は、附属図書館本館内に併設されたが、実際は名ばかりのものであった。

## 第2節 基礎づくり

### 1. 本館の事務体制の整備

前述のとおり、附属図書館本館は、文理学部構内に開設されたが、当初の事務機構は事務長もおかれず、5名の職員によって運営された。

昭和26年7月、本館において閲覧業務を開始、翌年7月初代の事務長として、南雲由松が発令された。同時に係も庶務係、司書係の2係となり、ようやく事務体制が整った。翌年4月、運用係が設置されたが、何れも主任制であった。

開設当時は、図書の整理についても経験者が少なく、特に基準となるものも定められていなかったもので、いわば、暗中摸索の状態であった。その中において、司書主任山本万吉はその豊かな経験を生かし、図書の分類や、整理の方式を確立し、千葉大学附属図書館の基礎を築いた。



図書の展示(昭和31年)

### 第3節 西千葉地区統合整備に向けて

昭和30年12月、2代目事務長として奥田秀行が就任した。同事務長は新進気鋭の事務長として、以後昭和37年までの7年間、図書館の基礎づくりのために尽力した。

#### 2. 諸規程の整備と改正

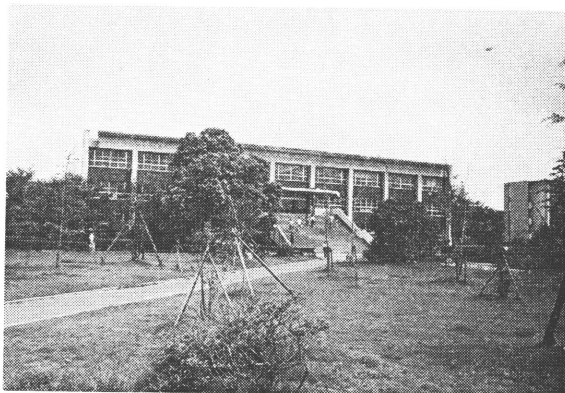
昭和25年7月、千葉大学附属図書館規程が施行され、これにより附属図書館の運営方法が定まった。

昭和28年2月、千葉大学附属図書館長の選考基準ができ、館長の任期は3年となった。

### 第3節 西千葉地区統合整備に向けて

#### 1. 附属図書館運営委員会

昭和28年9月に制定された附属図書館運営委員会規程は、学長の諮問機関として、学長、図書館長、各学部長、各分館長および部局図書室長により構成されており、大学図書館行政の重要な部分を担ってきたが、体制が整うとともに、実際の運営面において、幾多の課題をかかえることとなった。これらの課題に対処するためにも、運営機構の改善は必須の要件となり、昭和38年6月、附属図書館運営委員会規程の改正が行われた。この改正により、委員会は学長の諮問機関であると同時に、直接的には、附属図書館長の諮問機関として、以後、附属図書館運営の責務を負うこととなった。委員会は附属図書館長を議長として、各分館長、図書室長ならびに各部局から選出された教官各1名により構成され、小回りのきく、より実際的な審議機関に改められた。



本館(西千葉地区)

## 2. 本館の西千葉地区への移転

昭和38年7月、附属図書館は西千葉地区統合整備計画に基づき、その第2陣として、東京大学生産技術研究所の跡地に移転、同研究所機械工学科の木造2階建校舎を改装の上、プレハブ書庫300 $m^2$ を増築し仮設の図書館とした。立て付けが悪く、窓枠はすでに腐っており、いろいろな点で、極めて危険な建造物であった。

移転作業は夏季休業期間をえらび、図書を配架する際の混乱をさけるため、周到な計画が立てられ、搬入が行われた。これは図書館にとっては初めての経験であり、その後引き続いて実施された分館からの図書移転作業の先駆となった。この特殊ともいえる、比較的面倒な作業は、就任して間もない事務長能勢義夫によってスムーズに行われた。

## 第4節 成長期

### 1. 分館の統合

昭和38年7月、附属図書館が、東京大学生産技術研究所跡地に移転したことは、さきに述べたとおりである。

昭和39年7月、工学部分館が、松戸市岩瀬から附属図書館への移転を完了。教育学部分館は、殆んど機を同じくして附属図書館へ図書を搬入し終り、ここに、教育学部分館、工学部分館および文理学部図書室は、以後、附属図書館に包括されることとなった。

昭和39年9月16日、統合時の管理換図書冊数は工学部分館分、39,979冊、教育学部分館分、30,730冊であり、附属図書館は統合前の所蔵冊数54,056冊を加え、ここに、124,765冊の蔵書をかかえることとなり、利用対象者は一抛に2,560名から4,270名にふくれ上った。

館長吉武好孝教授は、大学図書館の近代化に心を砕き、つぎつぎに新しい構想の具体化をはかった。仮設の図書館は、わずか1,540 $m^2$ のものにすぎなかったが、利用者の身近かな図書館とすることに腐心した。ブラウジング・ルームの開設、参考指定図

## 第4節 成長期

書閲覧室の設置等がそうであった。効果はたちまちあらわれ、以後、新館落成に至る3か年間、時に入館を制限するほどの盛況をみることができた。したがって、近代図書館への歩みは、すでにこのころから始まったとみてよい。

昭和42年4月、薬学部の西千葉地区への移転に伴い、薬学部分館が附属図書館に統合された。

こうした状況の変化に対応し、統合の実をあげるためにも、事務機構の整備は焦眉の急となり、昭和39年4月、運用係が設置された。これにより、管理係は総務係と改称、図書館業務の基本機構とされる総務、整理、運用系の3つの柱が確立した。これは附属図書館が設置されて15年目のことである。

## 2. 施設の拡充

### (1) 附属図書館の新営

昭和42年4月薬学部を最後に、西千葉地区へ統合予定の学部の移転は完了し、その時点での図書館の利用対象者は、学生5,370名、教官426名となり、建物の規模においても中央図書館としての機能をはたしえない状態となり、また建物も老朽のため危険性が強く、その新営の必要が痛感された。

これよりさき、昭和40年夏、館長荒井栄教授は就任早々、その必要を提案、翌昭和41年、新営工事の概算要求を行う一方、運営委員会に特別建設小委員会を設け、新館の建築計画について討議を重ねた。

時あたかも、文部省では大学図書館施設の近代化を目指し、大学図書館施設研究会を発足させ、いわゆる「大学図書館施設計画要項」を検討中で、本学の小林秀弥教授（工学部）がたまたま当該研究会の有力メンバーだったようないきさつから、特別建設小委員会の委員長として参画されたことは全く時宜をえたと言うべきであった。

新営に関する基本方針は、大学図書館施設研究会答申の趣旨に沿い、大学図書館の近代化と閲覧者第一主義をモットーとし、あわせて図書館資料の効率的な活用をはかり、図書館をして魅力のある、教育研究活動の中核たらしめることにあった。

工事は昭和42年10月着工（施工者安藤建設（株））、翌年4月竣工し、8月28日落成式、続いて9月9日重陽の佳節に開館の運びとなった。

落成当初の概要は次のとおりで、学習図書館としての機能を十分に考慮し、館内は全面的に開架閲覧方式を採用した。

図 書 館 面 積 (単位 m<sup>2</sup>)

階 別	図書館閲覧室	書 庫	図書館管理部	計
地 階			264,000	264,000
1 階		198,000	1,168,696	1,366,696
2 階	1,168,696	198,000		1,366,696
3 階	1,354,320			1,354,320
屋 階			75,878	75,878
計	2,523,016	396,000	1,508,574	4,427,590

## 閱 覧 座 席 数

学 生	一般閲覧室	218席	教 官	教官閲覧室	16席
	指定図書閲覧室	132		特殊資料室	10
	参考図書閲覧室	16			
	雑誌閲覧室	24			
	軽読書室	24			
	自習室	64			
	計	478席		計	26席

学生数の約10%、教官数の約5%

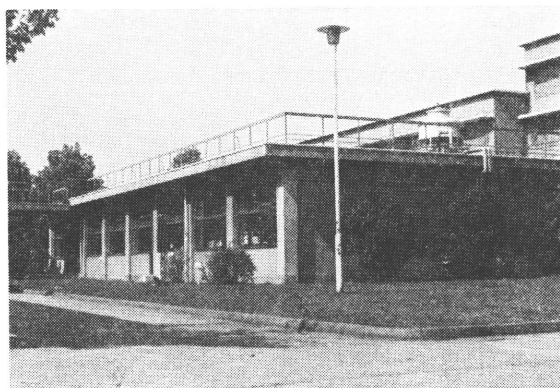
## 図 書 配 架 状 況(昭和43年10月現在)

	現 在 数	収用可能冊数
開 架 室	13,000	50,000
指定図書閲覧室	9,000	20,000
参考図書閲覧室	2,500	8,000
特殊資料室	3,000	30,000
書庫(積層3層)	90,029	150,000
計	117,529	258,000

注：各学部研究室貸出書籍および分館蔵書数を加えれば約350,000冊である。

## (2) 医学部分館の新営

昭和46年3月、基礎医学棟に近接して、医学部分館(第1期工事分)が竣工した。当初約1,850m<sup>2</sup>の基準面積により、計画が進められていたが、諸般の事情から1,128m<sup>2</sup>が部分的に竣工したものである。施設計画は、ほぼ「大学



園芸学部分館

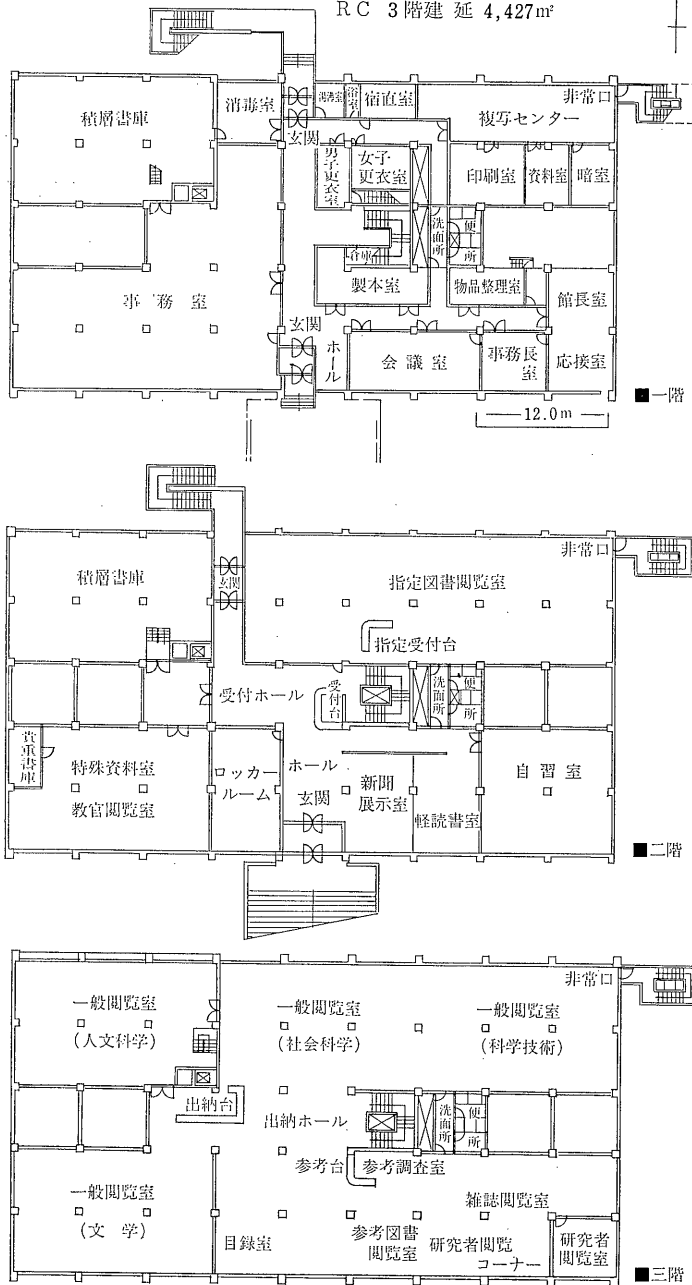
第4節 成長期

平面図（昭和43年4月新営）

本館

（昭和43年4月新営）

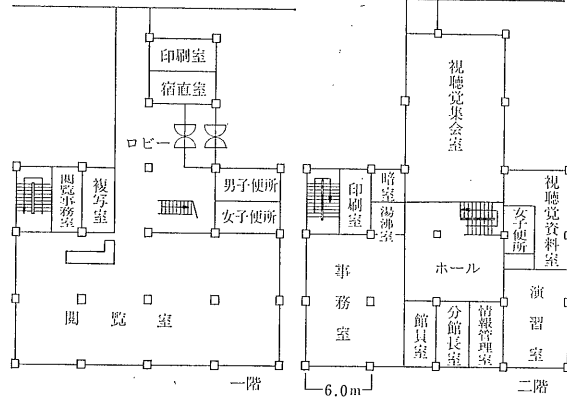
R C 3階建 延 4,427㎡





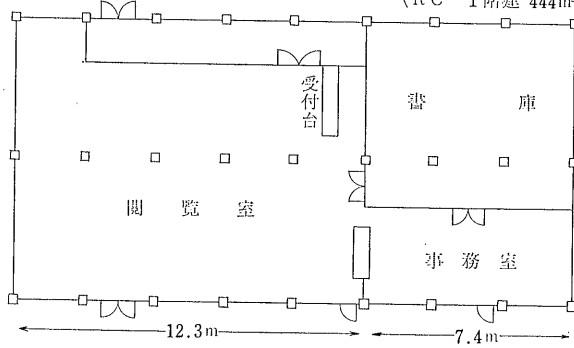
医学部分館

(昭和46年3月 新館)  
RC 2階建延 1,118㎡  
(764)



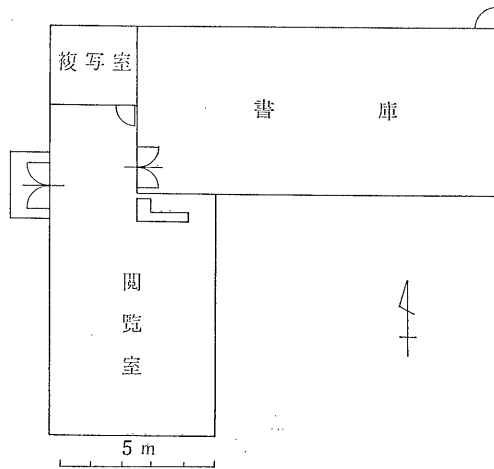
園芸学部分館

(昭和38年4月 新館)  
RC 1階建 444㎡



腐敗研究所分館

(昭和44年1月 移築改装)  
W 1階建 1,242㎡



#### 第4節 成長期

図書館施設計画要項」に沿ったものである。

##### (3) 園芸学部分館の新営

昭和38年4月、園芸学部分館が竣工した。これは去る昭和32年9月、評議会において、本学の統合整備計画が再検討されたおり、園芸学部は、松戸地区に残るということが決定され、その後、同地区整備の一環として新営されたものである。

新館は、キャンパスの中央に位置し、四季折々の花に囲まれ、その一部が学生ホールに使われたことも手伝って利用者もふえ、分館の態勢も除々に整備されていった。昭和48年3月、学生ホールを閲覧室に改装、閲覧座席数をふやすとともに、ブラウジング・コーナを新設した。

##### (4) 腐敗研究所図書室の改装移築

昭和21年9月、腐敗研究所図書室は、千葉医科大学衛生学教室から、保管転換をうけた図書を基にして開設。設立当初の蔵書数は和書95冊、洋書382冊、雑誌24種にすぎず、特に洋雑誌は皆無に等しかった。その後、逐年蔵書は増加の一途をたどり、このため書庫は狭隘となった。

そこで、従来から研究所構内にあった建物を、昭和44年5月に移築改装し、書庫64.6、閲覧室52.2、印刷室7.4、計124.2 $m^2$ の独立図書室とした。

### 3. 管理運営の改善

西千葉地区への統合と、附属図書館の新営およびこれに相前後して行われた分館施設の拡充は、本学図書館近代化の推進力となった。館長緒方惟精教授は、昭和43年第5回評議会にて、図書館の現状と、新館の運営について報告を行い、抱負を述べるとともに、内容の充実について、全学的な協力を要請した。昭和44年4月現在、附属図書館の概要は次のとおりである。

#### 4. 図書館維持費の増額

附属図書館の運営については、すでに運営委員会規程の改正により、館長の諮問機関であると同時に、学長の諮問にも応ずる体制が整っていたが、同委員会が図書館の切実な問

附属 図書 館	—本館
	(文理学部図書室 昭和39.9本館に統合)
	(教育学部分館 昭和39.9本館に統合)
	—医学部分館
	(薬学部分館 昭和42.4本館に統合)
	(工学部分館 昭和39.9本館に統合)
—園芸学部分館	
—腐敗研究所図書室	

題として、これに対処することになったのは、新館の落成を境としてからである。

図書館の維持運営費は、従来から学内控除および文部省からの図書館維持費により賄われてきたが、後者は、微々たるものであり、現在でもなお、前者の校費に負うところが多い。

附属図書館は新館業務の開始に備え、必要最少限の非常勤職員の補充をし、また、近代的諸設備と面積増による所要管理経費は、相当な額が見込まれた。館長緒方惟精教授は、機会あるごとに、この実状を訴えとともに、学内の協力をえることに努めた。昭和44年4月、幸いこれが全学の認めるところとなり、当初の予算配分額は、大幅な増額となった。増額の根拠は、前年度の支出実績額を参考とし、これを大学総経費に占める比率に換算した場合、校費の2.5%の額を、各学部が醸出することが妥当であるとされた。

維持運営費は、以後分館についてもこの中から配分され、その結果、本館、分館の関係も改善され、附属図書館は、中央図書館としての機能を確認することとなった。

## 5. 図書館業務の進展

附属図書館は、新館の開館以来、本格的な奉仕活動を開始し、画期的な発展をとげたが

---

昭和44年6月	「国立大学附属図書館協議会総会」を本学で開催
9月	「指定図書制度」開始
11月	「大学図書館視察委員」による視察
昭和45年4月	「共通基本図書購入費」配分開始
10月	腐敗研究所図書室「分館」に昇格
12月	「千葉大学雑誌目録」出版
昭和46年3月	医学部分館新営
10月	工業短期大学部図書室設置

---

業務の拡張にともない、運営の円滑化を計るとともに、新規事業計画を遂行するため、維持運営費の増額が必須の要件となった。このため、昭和46年度より、0.5%の増額が認められ、以後、附属図書館維持運営費は校費の3%となった。

#### 第4節 成長期

### 6. 腐敗研究所図書室の分館昇格

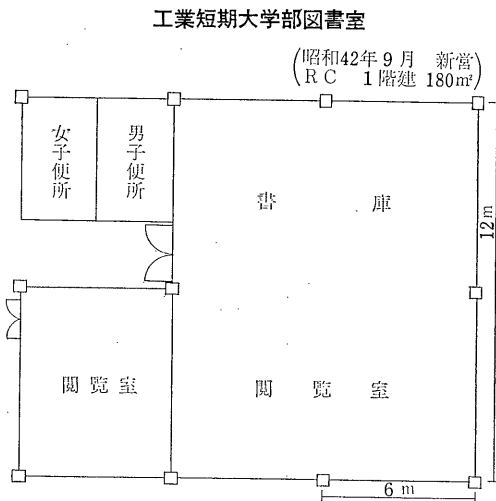
腐敗研究所はかねてから、研究態勢の充実と発展のため、分館設置を要望事項として検討してきたが、図書室の移改築を機に、蔵書、設備等も充実し、分館たるにふさわしい規模を有するに至ったとし、かつ一層の充実を期するため分館設置の申請書を附属図書館長宛提出した。諮問を受けた図書館運営委員会は、これを審議した結果、全会一致で承認、図書館長は直ちに、これを学長宛上申、翌昭和45年10月、腐敗研究所図書室は、附属図書館腐敗研究所分館に昇格した。同分館は昭和48年9月、研究所の改組に伴い、生物活性研究所分館と改称、その後、亥鼻分館が設置されるまで存続した。

### 7. 工業短期大学部図書室の設置

昭和42年4月、工業短期大学部は、校舎が増築された際、延 180 $m^2$  のスペースを図書室にあてるとともに、多額の寄附金を図書の購入に割り、その整備充実に努めた。

昭和46年9月、工業短期大学部より勤労学生の夜間教育における勉強環境条件の改善、質的向上を理由に、同図書室設置の要望書が提出され、同年10月、設置が認められた。

図書室が設置されて間もなく、このことが全国組織の国立短期大学協議会にとり上げられ、文部省へ「短期大学専用図書館の設置と、その充実整備ならびに指定図書制度について」の要望となってあらわれ、短大系の図書館整備の嚆矢となった。



### 8. 大学紛争下の図書館

昭和40年代なかばは、紛争と改革の波が大揺れに揺れる中で、図書館の進むべき道を求めた時でもあった。

昭和44年5月開催の、図書館運営委員会は、緊急事態における図書館（対策）運営

について、封鎖、占拠を未然に防止することを決議しており、一方、図書館職員の有志が、早期収拾方の要望書を携え、湊 顕学長代行に会見を申込みなど、緊迫した事態に対する図書館の姿勢の一端をうかがうことができよう。

昭和46年5月、医学部助手会より「部局図書委員会ならびに附属図書館運営委員会の構成員に助手を加えよ」との要望書が提出された。運営委員会はこのことについて、慎重に審議を重ね、その結果、部局図書委員会への参加に関しては、差支えないとしたが、運営委員会への参加は大学改革委員会においても、検討されつつある段階であり、時期尚早であるとしてしりぞけた。いずれにせよ、学部委員会への積極的参加の表明が助手会によってなされ、附属図書館規程の一部改正が行われた。

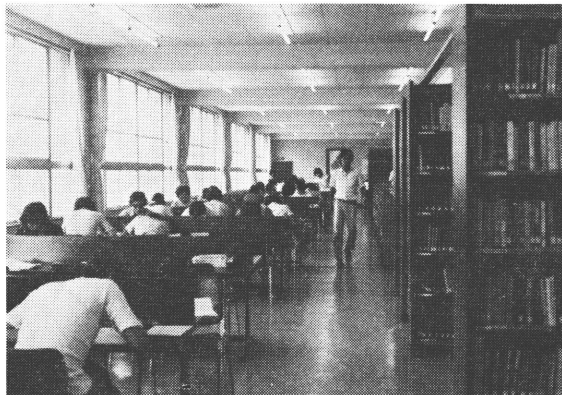
## 9. 附属図書館の利用状況

新館開館後の利用状況はどうであったか、平均的時期を選んで実施した調査の結果を1102、1103ページに示す。これは当時の利用状況を知る好個の資料で、その後の、教育面における図書館の重要性を、認識するよい反省材料となった。

## 10. 事務機構の整備

分館の統合により、附属図書館は全学的な連絡調整機関として重要度を増すことになった。維持運営費の配分がそうであり、昭和42年度より実施された外国雑誌購入の一括契約事務がそうである。更に一步すすめて、翌昭和43年度から実施された前金払方式による一括契約事務は、他大学にさきがけたものとして高く評価されている。

このような実績もあって、参考調査係（昭和45年4月）および受入係（昭和46年7月）が相前後して新設された。なお、分館の整備にともない、すでに昭和39年4月には、園芸学部分館に、図書係長がおかれ、腐敗研究所図書室も、分館に昇格（昭和45年10月）と同時に図書係長がおかれた。



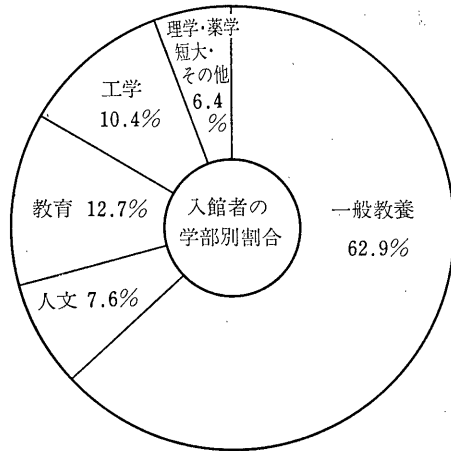
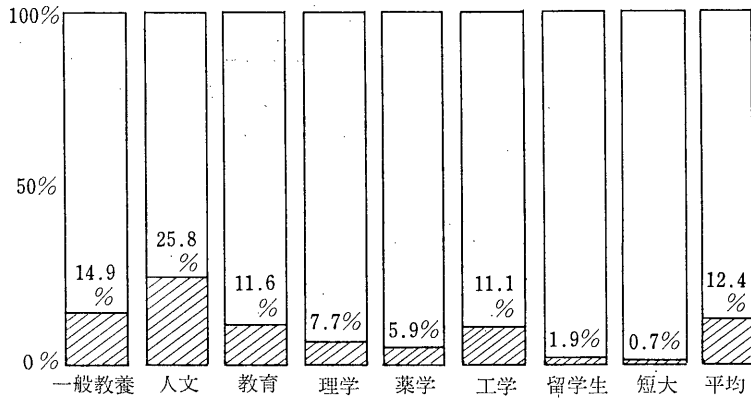
本館閲覧室

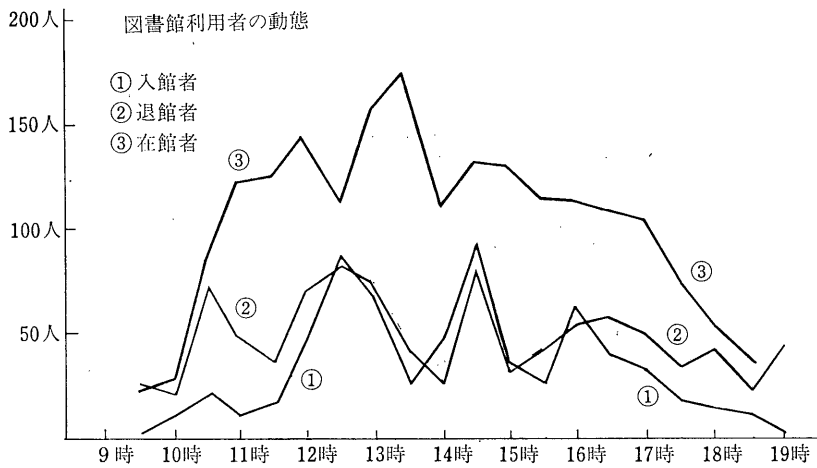
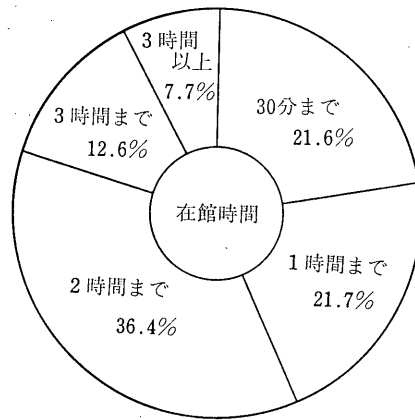
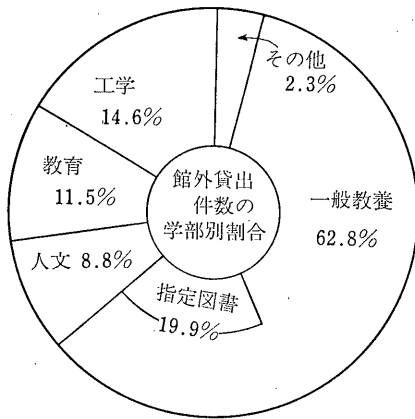
第4節 成長期

附属図書館利用状況調査

- 調査時期 昭和45年6月15日(月) 雨  
16日(火)雨、17日(水)曇
- 入館者数 2,436人 (1日平均812人)
- 館内閲覧冊数
  - 一般図書 1,154冊 (1日平均385冊)
  - 指定義書図 319冊 (1日平均108冊)
- 館外貸出冊数
  - 一般図書 383冊 (1日平均128冊)
  - 指定図書 95冊 (1日平均32冊)

学部別入館率





参考 館外貸出冊数の統計推移

年度	館名	本館	教育	医学	薬学	工学	園芸	生研
昭 30			3,078		1,045	(館内も含む) 6,502	1,631	
	35	3,177	2,378	3,817	1,121	2,048		483
	40	4,935	本館に 統合	10,903	2,622	本館に 統合		
	45	35,184	本館に 統合	4,848	本館に 統合	本館に 統合	5,270	214
	50	54,512	本館に 統合	4,293	本館に 統合	本館に 統合	5,510	317

## 11. 指定図書制度

昭和44年6月、指定図書購入費が示達され、千葉大学は指定図書制度の実施校に指定された。

これまで、本学においては、一部有志の教官により、試行的に実施されてきたが、どちらかといえば、カリキュラムにあった比較的利用度の高い学習参考図書をえらび、これを参考指定図書閲覧室に配架したに過ぎなかった。

指定図書購入費は差し当り、一般教養課程の受講学生を対象としており、実施に際し当然授業計画にもかかわることとなり、附属図書館はこれまで以上に、教養部との緊密な連係関係を結んだことはいうまでもない。

以後、この制度は定着し、配架冊数は1万冊におよび、指定図書購入費打切り後も、教養部がこれを引継ぎ、今日に至っている。

## 12. 文部省大学図書館実地視察委員の視察

新館が開館して間もなく、大学図書館視察委員による実地視察をうけることとなった。

本学担当の視察委員は、大野実雄（早大教授）、梅村又次（一橋大教授）および木寺清一（図書館短大教授）の3委員であり、教育面における大学図書館サービスの実情について、詳細な説明を求められたが、視察の結果、次の事項が指摘された。

（文大情第502号—昭和45年3月25日）

大学図書館の改善充実について（一部略）

- 1 管理・運営からみて館長の任期が3年であること。職務上当然に評議会のメンバーとなっていること。また前館長が慣習的に必ず図書館運営委員会のメンバーとして選出されていることは類例の少ない特色である。
- 2 人事交流は、よく配慮されているようであるが、現在職員数41名のうち臨時職員21名の人員配置は職務の責任体制からみて好ましいことでないので、学内定員の再配置等により図書館職員の増加をはかることが望ましい。
- 3 参考業務に従事する職員ならびにそれらの業務に必要な参考図書等が不十分と思われるのでこれらの充実をはかられたい。とくに、参考業務担当職員の養成に留意されたい。



- 4 本館は、学習図書館として重点的に運営されているが、今後は大学図書館の近代化を図る意味からも研究図書館としての機能を兼ね備える方向に努力されたい。
- 5 図書館資料の合理的理管と効率的利用を図るため、各研究室に分散配置されている図書館資料の管理利用面について本館ならびに分館および研究室相互間の連絡調整を行い全学の共同利用に供し得る態勢を整備されたい。

### 13. 共通基本図書の整備

附属図書館はキャンパスの中央にあり、利用しやすさも手伝って、入館者は日毎に増え、開館1年後には、従来の3倍もの利用者を数える程になった。これにひきかえ、図書館自体の図書購入予算は極めて貧弱であり、必備のものとされる基本図書、参考図書類は、教養部が計上する一般教育用図書購入費の一部をさいて、これに充てる程度の微々たるものであった。また、分館の統合により、蔵書冊数こそ増加したものの、これらの図書は、殆んど戦前発行のものであり、閲覧に供しうるものではなかった。

昭和44年9月、運営委員会は、このままでは、図書館の充実は望むべくもないとし、図書館必備の基本図書、参考図書の整備を重点事項とした購入計画案を学長宛提出することとなった。

この購入計画案は、学長をはじめ評議会の認めるところとなり、昭和45年度より、学内措置により「千葉大学共通基本図書購入費」として予算化されることとなった。この経費が、その後の図書館資料の充実に寄与したところは大きい。

### 14. 成長から発展へ

これまで見てきたように、昭和43年8月、新館の開館にはじまり、指定図書制度の実施、共通基本図書購入費予算化による資料の充実等により、図書館は急速に発展、拡充された。いま過去10年の推移を見ると、隔世の感さえ覚える。

しかし、一方、これに付随して招来された図書館資料の多様化と、業務の高度化は運営上多大の支障をきたし始めた。これは、図書館職員に占める非常勤職員の異常な高率さに加え、引続く学科、学生の増、および図書館資料の急激な増加に対応する図書館要員の学内配置が、適正に行われないうまま推移したことに起因すると推測された。

第4節 成長期

図書館資料の年間増加の推移

区分	図書受入冊数	雑誌受入種類数	図書購入費 (千円)	備考
昭和39年度	3,221	681	6,938	
40	8,210	1,153	21,415	
41	11,511	1,145	32,075	
42	12,622	2,277	38,212	
43	15,907	2,398	45,095	新館開館
44	24,031	2,489	59,930	指定図書制度開始
45	23,768	2,309	70,875	
46	24,731	2,629	76,219	
47	21,691	2,973	91,780	
48	22,460	2,905	100,610	

このため、昭和47年10月、館長市原権三郎教授は、運営委員会の議に基づき、「図書館職員の定員増についての要望書」を学長あてに提出したが、総定員法の現状下では、早急な解決は、極めて困難というほかはなかった。

附属図書館非常勤職員賃金の推移

区分	運営費 (千円)	賃金 (千円)	割合 %	非常勤職員 勤数 名	備考
昭和40年度	2,421	863	33	8	
41	5,239	1,745	33	9	
42	16,350	3,671	22	10	
43	9,740	5,604	57	19	新館開館
44	19,212	8,938	47	20	
45	24,830	10,900	44	20	
46	27,958	11,280	40	20	
47	36,460	14,491	40	19	
48	35,437	17,419	49	19	

同年12月、曾我準定事務長が勸奨により退職した。曾我事務長は、西千葉地区統合の折、附属図書館事務長に就任、以来歴代の館長を補佐し、図書館充実のため努力した。

昭和48年4月、事務部制が敷かれ、附属図書館は、2課5係（整理課—総務係、受入係、整理係、閲覧課—運用係、参考調査係）となった。初代事務部長には学生部次長佐々木佑三が就任、事務長田中豊慶は整理課長に配置換となった。部制への移行は、より強固な業務体制の確立をもたらしたが、定員増の極めて厳しい条件の中で、如何にして図書館業務の拡張をはかるか、これが附属図書館事務部に与えられた当面の課題となった。

昭和48年は、いわゆるオイルショックにより、諸物価が異常なまでに高騰し、この

あおりから、図書館の健全な運営が危ぶまれつつあった。昭和50年に至り、文部省配当による図書館維持費および図書購入費の大幅な増額があった。これは、国立大学図書館協議会の積年の努力が、ようやくにして実ったものであり、これを契機に、附属図書館は、成長の第2段階に入ることとなった。

## 第5節 発 展 期

### 1. 目録作業の省力化と標準化

#### (1) 国立国会図書館印刷カードの購入

これまで日本の大学図書館等では、図書の目録業務は、大方図書館員の手仕事によっていた。目録の記述にあたって、和書については、日本目録規則があり、洋書については、英米目録規則等があり、これらの規則に精通した司書が、各館独自の方法で図書の目録を作成してきた。しかし、目録業務は手間のかかる仕事であると同時に、本来ならば、同一図書については、同一目録が作成されるはずであるが、記述の異なった目録となる場合がある。そこで、これらの欠点を補うためにも、目録業務の省力化、標準化が必要になってきた。その最も手取り早い方法は、既製の目録カードを入手する方法である。日本でも国立国会図書館では、納本された図書については、以前から印刷カードを販布しているが、本学でも、昭和45年10月発行以降の和書については、全部門を購入し、本学で購入した図書と同一の目録カードを、これらの中からとり出し、必要枚数を複製、閲覧に供している。使用状況は、購入した目録カードの約20%、本学で購入した図書と合致する目録カードは、60~70%位で、ロスがまだまだ多く、後で紹介するMARC打出しカードによる方法までは、程遠いのが現状である。

#### (2) 日本目録規則の改定

『日本目録規則 1965年版』は著者基本記入、すなわち著者名主記入という欧米の近代目録に準拠している。しかし、10年以上経った現在では、著者基本記入方式を否定する考え方、その他国際的にも、目録の標準化という考え方から、著者を標目とする方式には問題が多いことなどもあり、標目未記載の記述独立方式を採用した『日本目録規則 新版 予備版』が、昭和53年受入れの図書から、国立国会図書館印刷カー

## 第5節 発 展 期

ドにも適用されることになった。これにより、図書館の司書が、図書目録作成の際に、標目を何にするかで頭をなやますことがなくなった。標目の欄には、必要に応じて著者名、件名等を記入すればよい方法になった。従って、カードに記入されている内容のうち、我々の目に先ず入るものは書名になった。本学図書館でも、従来あった著者・書名目録に代り、完全に書名と著者名に分割された目録が、今後は閲覧に供されることになる。またこれを機会に和書の目録作成に関しては、かなり標準化でき、機械化し易くなったといえる。

### (3) MARC II 打出しカードの受入

MARCとは、Machine Readable Cataloging の略称で、日本語に訳すと機械可読目録となる。これは、米国議会図書館（略してLC）が1969年以降に出版された英語で記述された図書について、その目録内容を電算機により入力した磁気テープのことで、これから打ち出した目録カードを、文部省が、各大学図書館からの注文に応じて、国立大学に限り、無償で配布しているものである。国立国会図書館印刷カードに比べて大きな相違点は、i)すべて電算機により処理していること。ii)米国発行の図書については、LC番号が記入されているので、この番号で目録カードを注文すれば、必要なカード枚数が、2週間以内に入手できることである。また、1972年以降欧米の図書で、国際標準図書番号（International Standard Book Number 略してISBNという。図書を個別化するために、付番される世界共通の形式番号）を持つものについては、この番号でも注文できる。従って、最近では、英語の出版物に限らず、フランス語、ドイツ語、スペイン語等の図書についても入手できるようになった。

以上、2つの方法で目録業務はかなり省力化、標準化された。今後の課題は、国立国会図書館によるJAPAN MARCの実施にあると思われる。

## 2. 出版物の刊行

### (1) 『町野家文書目録』の刊行

昭和30年に、千葉市犢橋町の町野久衛氏から寄贈を受けた、旧名主町野家襲蔵の古文書約700点および明治期の新聞1,000点を収めた『町野家文書目録』91頁が、昭和44年小笠原教授（人文学部）ほか数名の方々の御尽力により、完成されたので、これを関係諸機関に配付した。

### (2) 雑誌総合目録の刊行

本学の雑誌所蔵目録は、昭和38年に『千葉大学医学部医学雑誌所在目録』が、医学

部分館より刊行された。次いで、昭和43年本館の新築落成を機に、全学の図書の効果的な利用をはかるため、特に利用度の高い全学所蔵の雑誌総合目録作成が、一番必要であるとの内外の声があり、約2年間の準備期間を経過した昭和45年12月に、和洋合わせて6,391種を収録した『千葉大学雑誌総合目録 1970年版』323頁が完成した。

### (3) 蔵書目録の刊行

雑誌の総合目録と併行して、図書についても、西千葉地区統合後、逐次、蔵書目録を発行していく計画がたてられた。その結果、ほぼ5年を単位として、昭和40年度から45年度までに受入れた和漢書を、収録の対象にし、昭和47年に『千葉大学蔵書目録、和漢書、人文科学、社会科学』昭和49年に『同自然科学、工学・産業』を発行した。しかし、洋書編は予算の関係で発行を見送らざるを得なくなり、現在中絶している。また図書は、雑誌に比べて目録編成上人手を要し、印刷費も嵩ぶるので、今後の発行があやぶまれている。

### (4) 『図書館で学ぶために』の刊行

昭和44年度から、共通基本図書購入費の予算化により購入した図書は年毎に増え、本館および分館の参考図書はかなり充実した。また一方では、今後の状書方針を計画する必要から、『参考図書目録 1972年版』を昭和47年に発行した。ついで、当時の館長市原権三郎教授の提案により、学生の勉学に必要な、参考図書利用のための冊子『図書館で学ぶために』（A5版135頁）を発行（昭和49年3月）した。

同年4月新館長石田周三教授は自らこれに加筆、訂正し翌年改訂版として発行した。この冊子は、昭和49年度の国立大学図書館協議会の認めるところとなり、岸本奨励賞の栄誉を得た。なお本書は、毎年新入生に配布されている。

### (5) 『千葉大学学術雑誌総合目録 自然科学欧文編』の刊行

文部省は、昭和50年『学術雑誌総合目録 自然科学欧文編』を刊行した。従来、手書きのカードを集めて編集発行していたものを、電算機を使用して編集発行した画期的なものである。本学では、全国に先がけて、この中から、千葉大学所蔵のものだけを抽出し、これに備付部局名を付し、更に誌名の Keyword 索引をつけて、昭和51年に標記の目録を発行した。ひきつづき『学術雑誌総合目録 人文科学、社会科学欧文編』の発行も予定されているが、今後は欧文誌の目録はすべて、電算機から打ち出されたものになるろう。

### (6) 館報「図書館の本」の刊行

これまで、図書館に関するニュース等については、「学報」「学園だより」「千葉大学広報」を通じてPRしていたが、館の組織も拡大され、情報量も増えてきたので、

## 第5節 発 展 期

本館では、昭和49年7月から「図書館の本」という館員の手書きによる印刷物を作り、主として学生を対象に配付してきた。内容は、図書館に受入れた図書、雑誌の紹介、参考質問等が中心であった。しかし、図書館活動を内外に正しくPRする必要から、「図書館の本」第10号（昭52）の発行を機に、=千葉大学附属図書館報=「図書館の本」と命名し、内容も更に充実刷新した写植印刷による機関紙を発行し、教職員、学生に配付した。また学外主要図書館に相当数送付し、他大学図書館報と交換することにした。

### (7) 教官著書出版記念会

昭和46年12月から、千葉大学評議会第三小委員会主催による、本学教官出版記念会が、事務局の手で行なわれた。図書館では、年間に出版された本学教官著書の調査と、収集を分担し、毎年12月現在で、その著書目録を作成、記念会当日披露した。これらの目録は、すべて「学報」に掲載されているが、寄贈を受けた図書は、翌年はじめ館内に展示し、終了後は一般の閲覧に供し好評を博していた。この出版記念会は、昭和50年で終了、翌51年からは、教官著書、論文カードを年末に図書館へ提出する方法に変更し、現在に至っている。このカードの様式は、タナックカードセレクトターで選別できるようになっており、その結果の一部は、keywordを用いた検索方式の例として「千葉大学広報」に随時掲載されている。

### (8) 紀要の交換について

本館では、西千葉地区各学部発行の紀要の寄贈を受け、他大学発行の紀要との交換業務を行っている。大学の紀要は、非売品が多く、入手し難く、種類数も多いので、中央館で集中管理しようというのがその目的である。現在、本館で寄贈を受けて交換を行っている学内の紀要は、下記のものであり、交換先は主として国立大学、公私立大学、試験研究機関等、海外では、米国議会図書館、英国国立図書館、一部の大学図書館等である。記：人文研究、法経研究（人文学部）、教育学部研究紀要、銚子臨海研究所研究報告（理学部）、工学部研究報告、教養部研究報告A・B

## 3. 国立大学図書館協議会への協力

国立大学図書館協議会は、国立大学の附属図書館を会員とし、相互の連絡と協力により、国立大学図書館の振興をはかり、大学の使命達成に寄与貢献することを目的としており、予算・人事・奉仕等の分科会を持ち活動している。ここではこの協議会の中で最も活発に動いている図書館相互協力調査研究班について簡単に紹介する。昭和

51年1月本調査研究班は、石田館長と田辺事務部長のもとで、千葉大学を主査館として関東地区協議会の8大学と東大、東工大を加えた10館で発足した。昭和50年度は、「相互協力活動の推進のための方策」「文献複写サービス」について調査研究した。昭和51年度は、館長三浦義彰教授を迎え、前年度の具体策として文献複写マニュアルの作成、会計事務簡素化のための文部省への要望書の作成について検討した。この報告書は、第24回国立大学図書館協議会の総会で発表した。昭和52年度は、大学図書館基本問題特別委員会で検討された「保存図書館とその具体化をめぐる諸問題」を調査研究することになった。この中で、当調査研究班は、保存図書館とは、「保存と共同利用を含め積極的に資料を収集し、情報管理をも行う図書館」と定義し、今後は、共同利用図書館という名称で検討することにした。その手始めとして「共同利用図書館に関するアンケート調査」を行い、その調査結果を第25回総会で発表した。主な点を要約すると、国立大学の多くが、共同利用的な図書館の設置を希望しており、そのためには図書の移管手続の簡易化、専任職員の確保、国内にない外国雑誌の積極的収集と情報管理を行う等の意見を持っていることが分った。昭和53年度以降は、横浜国立大学附属図書館が主査館として共同利用図書館構想の検討を更にすすめることになった。なお文部省への要望書にもあった文献複写業務の簡素化については、全国国立大学相互間の会計処理を電算機で行う方法が昭和54年度から実施される予定で、これが具体化すれば、複写物の入手は一段と速くなるはずである。

#### 4. 生物・医学情報図書館構想

##### (1) 生物・医学情報図書館（仮称）計画案

昭和50年9月、館長石田周三教授により、図書館の将来構想として、標記計画が提案された。

本館は、従来、いわば学習図書館として重点的に運営されてきており、教育面での成果は著しいものがあるが、研究図書館としての機能面に欠けるきらいがあった。この欠陥の是正と、着々と進む亥鼻地区の整備に着目して、ここに新しい構想にもとづく研究図書館を設置しようとするのがそのねらいであった。ここにおいて考えられた図書館はさし当り、亥鼻地区に共通のライフサイエンスの分野を包括した「学術情報センター」としての図書館であり、この地区もしくは、全学の要求を満たすだけでなく、将来、国内における生物医学学術情報網の一環となり得る態勢を整えようとするものである。

## 第5節 発 展 期

この構想は、評議会第三小委員会の了承のもと、同年10月、原案の作成へ向け、生物医学情報図書館企画委員会を発足となり、数次にわたる討議の結果、次の最終原案が採択された。

### 生物医学情報図書館構想案(抄)

(概要) 当面、亥鼻地区に共通のライフサイエンスの分野を包括する複合図書分館を亥鼻地区中心部に設立する。施設は、20年先を見込み、収容冊数22万冊、座席数170席および最新の情報処理機器を備え、総面積およそ3,000m<sup>2</sup>の規模を有する、学術情報センターとしての機能を附与した「生物医学情報図書館」とする。

(資料) 亥鼻地区に共通の生物医学系資料、特に、学術雑誌および専門学術書を収集管理し、閲覧に供する。

(利用) 開架閲覧方式とし、7万冊程度を閲覧コーナーに配架する。閲覧室のほかセミナー室、視聴覚室、集会室を用意する。

(機械化) 従来のコピーサービスに加え、情報処理機器を導入して学術情報センターとしての機能を発揮させる。

(その他) 略 (組織・運営) 略 (事務組織) 略

この計画の推進は、館長三浦義彰教授に引継がれ、関係委員会および評議会の議を経て、生物医学情報図書館設立準備委員会が発足した。委員会は、さきの原案の具体化に向けて、審議が重ねられることになった。この間、亥鼻地区では、看護学部、生物活性研究所、新病院と相次いで新築工事が完成、一方、看護学部では学年進行に伴い、亥鼻地区で専門課程の授業が開始されるに至った。

昭和52年1月、第4回設立準備委員会は、このような状況の変化に対応するため慎重に審議した結果、亥鼻地区を対象とする分館の設置が先決であるとし、この検討方を亥鼻地区関係部局長に付託した。

### (2) 亥鼻分館の設置

昭和52年4月、亥鼻地区関係部局長連署による「亥鼻地区複合分館の設置案」が附属図書館長あて提出された。

これは、さきの生物医学情報図書館設立の早急な実現が困難なため、当面、医学部分館および生物活性研究所分館を統合、改組し、亥鼻地区複合分館の設立を要望したものである。その骨子は、母体となる医学部分館の増築、事務機構(事務長および3係制)、定員増(9名)の3項目であった。これを受けた附属図書館長は、図書館運営委員会の議を経て、概算要求の第1順位として提出した。

昭和53年4月、亥鼻分館が設置された。しかし、これは、事務機構だけで他の2項



目は認められなかった。ただ、定員削減の厳しい中で、学内措置による2名の定員増と、非常勤職員1名が加えられ、総員14名で発足できたことは幸いであった。

これにより、ともかく初期の目的である、生物医学情報図書館実現への第一歩を踏み出したことになり、将来への発展が大いに期待される。



亥鼻分館

## 5. 今後の課題

附属図書館は、当初、5分館、2図書室を擁して発足したが、昭和53年現在、本館、亥鼻分館および園芸学部分館の3館に集約された。附属図書館は、千葉大学30年の歩みの中で、基礎づくり—成長期—発展期へと、着実な歩みをつづけ今日に至ったといえる。図書館が大学の重要な機関として、教育と研究に十分な機能を果たしたかについては批判もあるが図書館としては最善を尽してきた。現在、附属図書館は改善すべき数多くの課題をかかえているが、当面する二、三の問題と将来への抱負の一端をしるして稿を閉じたい。

### (1) 施設の増築

その後の学生増と、予想を上回る図書館資料の増大により、施設はすでに狭隘となった。このため、各館とも数年来、増築についての概算要求を行ってきたが、本館については、昭和54年度にRC4階建の、増築が決定し、昭和55年度完成の予定となった。亥鼻分館については、亥鼻地区整備計画と、生物医学情報図書館構想にもとづく新営が、また、園芸学部分館については、学部の将来計画にあわせた増築が考えられている。

### (2) 電算機の導入

昭和53年度、電算機の導入が認められた。これにより、電算機による、図書館業務の合理化と、省力化が推進されることとなろう。手初めに閲覧業務の機械化を行い、ついで雑誌管理、図書予算管理等が予定されており、近い将来、分館とのリアルタイ

## 第5節 発 展 期

ム処理によるオンライン化を目指すこととしている。

### (3) 学術情報検索サービス

附属図書館においては、すでに端末機を設置し、TOOL-IR (Tokyo university on-Line Information Retrieval system) による、情報検索サービスを受けるための、準備もとのいい、一方、亥鼻分館では、JOIS (JICST On-line Information system) オンラインによる、情報検索サービスを、昭和53年9月から開始した。これらは新しいサービスの開始であり、研究図書館への指向を目指すものである。

### (4) 共同利用体制と収書計画

図書館資料の効率的な活用を計るため、本館および分館を核とする、有機的な集中管理と、全学的な共同利用体制を確立すべく、種々検討がなされようとしている。

この構想は、図書館の増築計画に、当然のことながら盛り込まれている。収書計画は、共同利用体制を前提とするものであり、この方針を、策定することが今後の課題となろう。

なお、昭和53年度から、学術審議会は文部大臣の諮問に応じ、「今後における学術情報システムのあり方について」検討しており、今後数年のうちに、図書館を含む日本の学術情報体制の飛躍的發展が予想される。この動きは、本学附属図書館の従来歩みと方向が一致するものであり、新しい全国システムの発展に大きな期待を寄せることができる。

## 6. 文 庫 案 内

### (1) 佐久間文庫

佐久間文庫の名称は、ドイツ語文法の専攻で、仙台二高の教授をしていた佐久間政一氏に由来する。氏は、田中康一名誉教授の先生で篠崎福二教授（人文学部）の岳父にあたる人である。本文庫は、佐久間政一氏の蔵書を、昭和25年受贈したもので、一部は教養部独語研究室にある。内容は、ドイツ文学、芸術、絵画等のドイツ語書が中心で、約1,200冊を収める。分類別カード目録がある。

### (2) 郭沫若文庫

本文庫は、長年日本に亡命、戦前千葉県市川市に居住していた前中国科学院長郭沫若氏（1891～1978）が、昭和30年当時の大槻信良助教授（文理学部）の要望に応え、文理学部へ「四部叢刊」「廿四史」「説文解字詁林」など約3,000冊を寄贈されたものである。このことについて、当時の千葉新聞昭和30年9月23日および10月25日付け

で大きく取りあげられた。

### (3) 東洋医学古書コレクション

本コレクションの内容は、本学医学部眼科学伊藤弥恵治教授（1891～1958）が、戦前に収集された古医書、および戦後佐倉の順天堂医院から譲り受けた蔵書が主なもので、約6,000冊を収める。本コレクションについて最近紹介されたものは、「千葉大学医学部百年史」があるが、「図書館の本」第12号記載の「東洋医学古書コレクションの紹介」が、その全貌を伝えている。その他下記論文等がある。

- 鈴木宜民；J. Sichelの眼病図譜（1856年刊）について（「銀海」11号 昭和40.2）
- 房総の先覚展 第1回 近代のさががけ—順天堂をめぐる群像—展示目録 昭和51年10月27日～11月9日 千葉県立中央図書館
- 柴衛図 千葉大学附属図書館蔵 解説：酒井シヅ（「図録日本医事文化史料集成 第2巻」昭和52）

### (4) 町野家文書

本章第5節—2に記載

### (5) ドイツ語音声記録

田中康一名誉教授が、自らドイツを訪れ、ドイツ古文献をドイツの高名な学者が朗読朗詠したものを、自ら収録した音声テープ101巻で、全巻を25インチ盤のレコード99枚に再録した貴重な財宝である。この盤は人文学部独文学研究室に保存してある。詳しいことは下記に記載されている。

- 田中康一：ドイツ語の音声記録について  
（「学園だより」7号 昭和43）
- 川喜田愛郎：田中名誉教授寄贈のドイツ語の音声記録について（同上）

表14-1 附属図書館経費の推移（職員給与を除く）

館別	年 度	総 計 (千円)	図 書 館 資 料 費			小 計	図 書 館 運 営 費				そ の 他 (千円)	小 計 (千円)
			図 書 (千円)	雑 誌 (千円)	そ の 他 (千円)		賃 金 (千円)	備 品 費 (千円)	消 耗 品 費 (千円)	印 製 本 費 (千円)		
本 館	昭和40	24,639	14,415	6,554	446	21,415	803	922	632	337	530	3,224
	45	95,705	52,274	18,601	0	70,875	10,900	728	1,213	3,701	8,288	24,830
	50	183,849	91,259	45,230	0	136,489	26,666	2,497	1,638	6,956	9,603	47,360
	51	236,115	116,725	70,006	0	186,731	26,537	6,122	1,997	8,576	6,162	49,384
医 学 部 分 館	40	19,061	8,822	8,666	0	17,488	0	417	37	1,095	24	1,573
	45	37,549	10,434	15,555	1,588	27,577	1,208	1,081	435	280	6,968	9,972
	50	51,578	17,277	24,858	796	42,930	1,512	1,937	963	3,585	651	8,648
	51	56,747	21,008	28,239	0	49,247	3,111	64	985	3,340	0	7,500
園 芸 学 部 分 館	40	2,574	1,549	859	0	2,408	0	28	26	112	0	166
	45	7,880	2,720	2,536	0	5,256	1,248	680	112	415	169	2,624
	50	25,056	8,513	9,188	1,060	18,761	3,353	104	173	2,556	109	6,295
	51	25,268	9,891	8,367	1,843	20,101	2,519	653	379	1,480	136	5,167
活 性 研 分 館	40	1,718	258	1,352	0	1,610	0	0	3	105	0	108
	45	5,387	452	2,968	240	3,660	1,491	52	27	157	0	1,727
	50	8,670	750	4,899	0	5,649	1,523	858	52	547	41	3,021
	51	7,996	589	4,766	0	5,355	1,721	108	87	641	84	2,641



別 表

表14-3 雜誌所藏狀況

年度	雜誌受入種類数			館 別	雜誌所藏種類		
	内 国	外 国	計		内 国	外 国	計
昭和 33	258	134	392	本 館	355	200	555
	270	173	443	本 館	370	239	609
	383	324	707	医学部分館	383	324	707
	52	21	73	薬学部分館	52	21	73
			22	腐 研 分 館	23	30	53
40	980	496	1,476	本 館	3,131	2,217	5,348
	343	483	826	医学部分館	737	1,023	1,760
	91	53	144	薬学部分館	91	53	144
	749	238	987	園芸学部分館	831	256	1,087
	23	50	73	腐 研 分 館	23	50	73
45	1,444	865	2,309	本 館	2,330	1,137	3,467
	502	541	1,043	医学部分館	978	1,184	2,162
	483	181	664	園芸学部分館	505	212	717
	205	119	324	腐 研 分 館	218	132	350
50	2,303	1,233	3,536	本 館	3,254	1,825	5,079
	695	638	1,333	医学部分館	1,621	1,836	3,457
	725	274	999	園芸学部分館	1,093	354	1,447
	228	89	317	活性研分館	271	99	370
51	2,327	1,194	3,521	本 館	3,289	1,889	5,178
	674	763	1,437	医学部分館	1,635	1,854	3,489
	717	282	999	園芸学部分館	1,085	362	1,447
	225	79	304	活性研分館	271	102	373
52	2,415	1,204	3,619	本 館	4,110	2,669	6,779
	871	981	1,852	医学部分館	1,635	1,854	3,489
	678	281	959	園芸学部分館	1,173	391	1,564
	70	70	140	活性研分館	271	102	373